

全体講評 学校教育部門

すべての作品において、制作者が一生懸命かつ楽しんで作っていることが感じられ、それゆえ、制作者の思いや願いが作品から伝わってきた。

記録や作品として多くの人に向けて発信する力は、地域や人々をつなげ、未来を拓くことに大きな貢献となる。郷土への思いを持ちながら、学習の成果や体験活動などを視聴覚教材作品として形にすることの価値を考えると、本コンクールに出品していただくこと自体大変素晴らしく、感謝申し上げたい。

今年度は、特に、地域の偉人や特産品、伝統芸能など身近な題材に注目して教材化した、地域色の濃い作品が多かった。文化・伝統を守るには、後継者の育成が大切である。山形県の文化を充実していくうえで、後継者がどうすれば育っていくのかをテーマにした作品が多く出品されることを願う。

一方、掘り起こした題材の「何を伝えたいのか」「伝えたい相手は誰か」をしっかり考えて制作にあたることが重要であると感じた。「誰か」については、対象を広げすぎると焦点がぼやけてしまうので、対象を絞ることも大切である。

また、制作者によって内容の差が感じられた。視聴覚教材の制作について研鑽を積んでいただきたいと思うとともに、主催者側にも研修機会や出品しやすい環境づくりへの支援を求めたい。

タブレット・スマホ世代の子どもたちにとって、どんなものが学習と結びつき、より効果のある学びにつながっていくのかという視点も加えるとともに、未来の郷土の姿を描いたり、タブレットや電子黒板を活用して児童生徒が興味を持つことができる新しい着想の教材を提示したりするなど、新しい技術やAIを利用して、作品の幅が広がっていくことを期待したい。